渋沢栄一物語

Shibusawa Eiichi History

［第1回］

生誕

渋沢栄一は、江戸時代も末期の天保十一（一八四〇）年二月十三日（旧暦）、武蔵国榛沢郡血洗島村（現在の埼玉県深谷市血洗島）に、父・市郎右衛門と母・栄の三男として生まれました。長兄次兄ともに早世したため、長男として育てられました。家は代々農業を営んでいましたが、栄一の育つころには、養蚕、藍玉（木綿の染料）の生産・販売、雑貨業、質屋業などを兼ね、特に、藍玉の年商は一万両を超え、村内でも有数の資産家でした。

当時の血洗島は、近隣の村々と合わせて岡部藩安部氏の所領とするところで、血洗島から南西に四キロメートルほど離れた地（現在の深谷市岡部）に陣屋（＝代官所）があり、その支配を受けていました。耕地面積は約四十四町歩（44ヘクタール）、そのほとんどが畑地でした。

父の市郎右衛門は、律義な性格で、仕事熱心、藍玉づくりの名人といわれました。また、書・俳諧にも巧みであり、栄一は五、六歳のころより、この父から学問の手ほどきを受けました。一方、その母栄はといえば、寒風の中、戸外で元気に遊び回る幼い栄一の身を案じ、羽織を持って追い掛ける姿を何度も目撃され、村人から「お栄の羽織」と揶揄されるほど、栄一をかわいがったようです。また、誰に対しても分け隔てなく接し、村内のあるハンセン病にかかった女性を手厚く保護するなど、大変慈悲深い人であったと伝えられています。

栄一が生まれたこの年、隣国の中国（当時は清国）では、アヘン戦争が始まるなど、十八世紀後半に始まる産業革命を経験し、圧倒的な軍事力と経済力を誇る欧米列強によるアジア侵略という恐るべき事態が、着々と進行していたのです。

（文：新井慎一）

▲市内血洗島にある栄一の生地「中の家」生家が火災に遭い、明治28年に上棟された

物語の手引き

『岡部藩安部氏』

清和天皇の子より出て、戦国時代駿河の今川氏に臣従し、安倍氏を名乗りました。今川氏滅亡後徳川家康に仕え、岡部領ほか五千石余りの領主となり安部氏を名乗りました。その後一万九千石余りに加増され大名に列しました。安部氏は明治維新を迎えるまで一度も移封はなく、一貫して岡部の領主であり続けました。

『アヘン戦争』

欽差大臣（特定の事柄につき皇帝の全権委任を得て対処する臨時官）林則徐がイギリス商人の持ち込む禁制品のアヘン（麻薬の一種）を没収・処分したことから、イギリスとの間に起こった戦争です。

※本コーナーの全編を通じて、登場する人物については、歴史上の人物としてその敬称を略します。また、年齢については、当時の通例に従い数え年の表記とします。

キラリ 熱・中・時・間

～青淵公園をキレイにする会～

久保田一雄会長

古き良き文化を再生したい

渋沢栄一の生地に隣接する青淵公園一帯では、かつて、ホタルが盛んに飛び交っていました。その春、ボランティア団体「青淵公園をキレイにする会」（以下「キレイにする会」）の皆さんが、園内にホタルが生息できる環境を整備。5月25日には、八基小学校の子どもたちと協力して、ホタルの幼虫を放流しました。

キレイにする会が発足したのは、公園の工事が始まった平成17年。園内を流れる清水川にたまったごみを何とかしようと地域の皆さんが集結しました。当初はごみ拾いだけの活動でしたが、今では広大な公園の除草作業から、花苗の植え込み、トイレ掃除など、維持管理全般を手掛けています。

平成19年からは、八基小学校の子どもたちが地域への奉仕として、キレイにする会と一緒に園内の清掃を実施。これらの活動が来園者の目に留まり、地元八基以外のかたも加わるなど、現在では会員74名を数えます。

久保田会長は「発足当初は、月1回のごみ拾いで、軽トラック2台分のごみが出ていました。それが今では、ごみ袋1袋にまで減るなど、ボランティア活動が地域一体の美化意識の向上に一役買っていると感じています」とうれしそうに語ってくれました。

今後は、かつて地域のかたに親しまれていた行事など、懐かしい風習や文化を再生しながら、多くの人々が集まる公園にしていきたいそうです。

▲真剣に花苗の植え込みをする「青淵公園をキレイにする会」の皆さん（青淵公園にて）

※気候にもよりますが、ホタルは7月中旬まで鑑賞できます（関連記事10ページ）。

ありがとうの手紙

優秀賞

小学校低学年の部

ランドセルくんへ

大寄小学校2年（現3年）　髙田　愛弓さん

いつも学校へ行くとき、わたしのべん強のどうぐを入れていってくれてありがとう。ふでばこや、教科書やノートに図書の本。すごくおもいよね。それに、わたしの家は遠くて、三十分い上かかるからたいへんだよね。でも、ランドセルくんががんばってくれるおかげで、わたしはたのしくべん強したり、あそんだりできるんだよ。

ねえ、ランドセルくん、あと五年間よろしくね。あつかったり、さむかったり、おもかったり大へんだけど、がんばってあるこうね。

夫婦道のススメ

今も変わらず 2人3脚で

大木泰榮さん（85歳）
とよ子さん（83歳）

本田にお住まいの大木さんご夫妻は、結婚63年目。結婚当初から農畜産物全般を手掛け、「働けることは最高なこと！」と、今も毎日畑仕事に勤しむお二人です。

昔はよくけんかもしたそうですが、四六時中一緒に作業をしていると、気持ちも自然と穏やかになっていったとか。

夫婦円満の秘訣は、「意見の食い違いがあるのは当たり前」と考え、お互いの好みを理解することだそうです。